■ 堀越川源流域観察会 ■

芸大新音楽部棟の建設はＣＯＰ10の成果
「愛知目標」違反、強行するなら愛知県と県立芸大は
生態系ネットワーク協議会から離脱するべき

12月11日堀越川源流の観察会が実施されました。先ずはじめに愛知県立芸術大学の新音楽部棟の建設予定地直下の堀越川源流域に行きました。現地は終戦前後に作られたと思われる砂防堰堤が数多く見られる急峻な場所で、足下には多くのスズカカンアオイが繁茂し、ギフチョウの食跡と思われる株も散見される、まさに群生地でありました。また花が終わって見つけにくい状態でしたが希少なラン科のミヤマウズラもマークされた以外の株が見つけられました。水中からは絶滅が危惧されるカワムツや多くのトンボのヤゴなどが参加者の調査でも確認されました。参加した長久手町の議員の皆さんも熱心に質問をされていました。また参加されたイタリア人はヨーロッパではいまどきありえない蛮行であるとあきれていました。つづいて、堀越川の恩恵を受けている下流域の水系を見てまわり、その広範さに驚きました。水田の排水路からは現在少なくなった、マシジミがいました。また、周辺に生育するセリなどもおいしそうに見えました。農村下水が普及している地域なので排水も比較的きれいでしたが、まだ一部生活排水、洗濯水が排水されるのも見られました。

途中、長久手町で初めて、今年、発見された**「マメナシ」**が多くの実を付けていました。周りは土地改良で削り取られ、残っていたのは**奇跡**といわなければなりません。

中根集落に近い堀越地区の田んぼの用水は、堀越川がグリーンロードをくぐったところにある手づくりの堰から左右に導水し、堀越川左岸、右岸側の堀越地区の水田に導水されます。

愛知県や、県立芸術大学は希少種が生息する堀越川源流部の水域の下流から工事排水などを放流する（長久手町議会答弁）としていますが、より高濃度の汚濁水が直近で排水され、水稲栽培者にとっては被害が心配されるところです。

愛知県や県立芸術大学は水利権者に対し、被害の可能性と発生した場合の保証のあり方について、説明責任があるのではないでしょうか。また、長久手町も同様です。

堰のすぐ下のプールには泳ぐ魚が数多く見られました。何万年もかけて、環境に適応した固有の魚はその場所以外で生育することは難しく、高濃度の汚濁水の排水で死滅することも容易に想像されます。こういった生き物を犠牲にすることで新音楽学部棟が建設されるということを教師や学生は知っているのでしょうか。

環境保全に無関心な企業は生き残ることはできないといわれています。大学は教育指導機関としてさらに高度なモラルが要求されることは言うまでもありません。県立芸術大学の教師は指導者としてゼネラリストであることも必要です。環境、行政、政治いずれの場面でもモラリストであるためにもっと勉強するべきであると思いませんか。少なくとも愛知県の環境政策については、「指導者」は共通の認識を持ってすべきであります。

長久手町の吉田町長は、助けがなければ生きられない、人も自然も守るといってくださいました。自然環境の中では人も他の生き物も植物も共存することで生き続けることができるということだと思います。「共生き」という言葉があります。私たちは人を取り巻く本物の自然環境があってこそ生存できます。

愛知万博、COP10、あいち自然環境保全戦略、名古屋東部生態系ネットワーク・ロードマップ、生態系ネットワーク協議会、と続く取り組みを無にする暴挙にならないよう、主体者、愛知県、愛知県立芸術大学の指導者の皆さんには望みたいものです。

長久手の「マメナシの奇跡」が起きますように・願・